



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	高等学校「情報」教員養成におけるメディア・リテラシー教育の可能性(fulltext)
Author(s)	和田,正人
Citation	教育メディア研究, 11(2): 23-30
Issue Date	2005
URL	http://hdl.handle.net/2309/105835
Publisher	日本教育メディア学会
Rights	

高等学校「情報」教員養成における メディア・リテラシー教育の可能性

和田 正 人 (東京学芸大学)

本研究は、高等学校教科「情報」の教員養成学生が、普通教科「情報」の授業において、メディア・リテラシー (ML) 教授を行う可能性について明らかにしたものである。質問紙調査を用い、25名の学生に ML と情報リテラシー (IL) とコンピュータ・リテラシー (CL) について、イメージ、認知度、リテラシーの区別、教授重要度を比較した。結果は、ML は IL と CL に比べて複雑であるとイメージし、認知度も少なかった。ML の内容は IL の内容と混同されていた。さらに、教授重要度は IL が高く、ML と CL には差がなかった。「情報」の授業で、ML を直接教えることは、本研究の結果と教員養成のシステムとカリキュラムから考えると難しく、同様に CL も重視しては教えられないことが明らかになった。しかし IL 教授の過程で、ML を教える可能性について議論された。

キーワード：メディア・リテラシー、教科「情報」、教員養成、情報リテラシー、コンピュータ・リテラシー

1. 問題の背景

視聴覚教育における映像教育は、メディア・リテラシー教育として Masterman (1985) によって新たに概念化され、日本の高校生に対しても実践され (全国高等学校新聞教育研究会, 2002; 登丸, 2003ab), 高校生向け教材も準備されている (Ontario Ministry of Education, 1989; Face to Face Media, 2003; 鈴木みどり, 2004)。さらに大学生向けのテキスト (Silverblatt, 1999) もあり、教員養成課程の学生への教育も始められた (斎藤, 2004; 園屋, 2002)。

高等学校の授業において、メディア・リテラシーを教える可能性がある教科のひとつが「情報」である。しかし、教員の専門性、学習指導要領等様々な問題が指摘されている (黒上, 2002; 森田, 2002; 水越, 2002)。そこで、本研究では、「情報」教員養成の立場から、教科「情報」の問題点を指摘し、「情報」教員養成学生のメディア・リテラシー教

育への態度を明らかにすることで、高校の「情報」の授業におけるメディア・リテラシー教育の可能性について検討する。

1.1 教科「情報」の教員養成

教科「情報」の免許取得には、数学や理科等の現職教員が15日間の免許認定講習会を受講して取得する方法と、大学の学部で取得する方法がある。さらに大学で取得する方法には、通信教育課程や理工学部等で「情報」免許科目を履修する方法と教員養成課程で免許取得する方法がある。

文部科学省は、現職教員の講習会による「情報」免許取得数を9,000人として計画した。しかし、高校生数からみると4,000人程度で十分であるために、学校現場では、数学や化学・物理等の教師が、自分の専門教科の合間に「情報」の教科を教えている場合が多い。そのために、教師は自分の専門科目の教材研究に加え、「情報」の教材研究を行なっている。さらに教育実習生の指導も自分の専門教

科を指導しながら「情報」を指導することが多い。

一方、新任教員は、予算上採用が控えられ、公立高校の教員募集は全国で50名以内（2004年度）である。また受検要件に数学か理科の教員免許取得があるのは、数学や理科の授業を教えながら「情報」を教えることを前提としたものである。

免許取得科目の内容から、理工学部と教育学部の理系の免許取得に限られるために、メディア・リテラシー的な側面が軽視されて「技術リテラシー」的な側面が重視されるという問題も指摘されている（山内，2003）。

したがって、現職の「情報」教員や「情報」免許を取得して新たに教員となる者がメディア・リテラシーの授業を行なうことは難しいと考えられる。

1. 2 普通教科「情報」の学習指導要領と教科書

普通教科「情報」の学習指導要領にはメディア・リテラシーやリテラシーの語句は用いられていない。また、水越（1996）による映像を中心とした概念としての「映像をよみとる力（受け手としてのメディア教育）」、「映像を活用する力（使い手としてのメディア教育）」、「映像を制作する力（送り手としてのメディア教育）」も明示されていない。さらに鈴木（1999）の「市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し」という定義や、水越（2002）の「メディアに媒介された情報を、送り手によって構成されたものとして批判的に受容し、解釈する」という定義に該当する箇所を学習指導要領の中から見つけ出すことも難しい。

黒上（2002）は、情報教育の目標のひとつである「情報社会に参画する態度」に重点を置いた教科「情報C」は、情報と社会や個人の生活の問題と深く関わる内容を扱うこととなることから、メディア・リテラシーに極め

て近い関係にあると指摘している。しかし、高校の授業では8割前後が教科「情報A」であり、東京都（2004）の場合でも、「情報C」の教科書を採択している都立高校は16%（283校中45校）である。さらに10社の「情報C」教科書のうち、メディア・リテラシーを扱っているのは2社である。したがって、メディア・リテラシーを「情報C」で教えることも困難があると考えられる。

メディア・リテラシーの概念や定義が学習指導要領になく、教科書でもメディア・リテラシーを扱わず、現職の教員や理工学部等で免許を取得した教員も教える可能性が少ないとすると、残された可能性は「情報」の教員養成の学生が、大学でメディア・リテラシーを学習し、教員になった時に、メディア・リテラシーを高校生に教えることである。普通教科「情報」の目標「情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる」の中に、教員が大学で学習した経験を活かして自分でメディア・リテラシーのカリキュラムを組み込んで授業を行なう努力が必要となってくる。

2. 「情報」免許取得学生のメディア・リテラシーの態度

情報教員養成課程の学生は、現職の教員が必要最小限の知識を講習会で得て他教科の授業を兼ねて教えることに比べ、大学でメディア・リテラシー教育について学ぶ機会がある。したがって現職教員に比べて教員養成学生がメディア・リテラシーを教える意欲が高い場合には、高等学校の「情報」の授業で、メディア・リテラシー教育を実施する可能性が高いと考えられる。したがって、本研究では、情報教員養成課程の学生のメディア・リテラシー教育への態度を明らかにすることで、「情報」におけるメディア・リテラシー教育の可能性を明らかにする。

2.1 回答者

高等学校「情報」教員養成課程の学生25名の3年生とした。調査時期は2004年11月である。すでに9月から3週間、附属高校での情報の教育実習を体験しており、4年生でも3週間、出身高校において情報の教育実習を体験する学生である。「情報」免許科目「マルチメディア論」の受講時に、質問紙調査を実施した。

2.2 質問事項

学生がメディア・リテラシーを「情報リテラシー」あるいは「コンピュータ・リテラシー」と明確に区別しているかどうかは明かでない。本研究では山内の分類(2003)に従い、メディア・リテラシーと情報リテラシーとコンピュータ・リテラシーの違いについて質問項目を設定した。山内(2003)の提唱する技術リテラシーは学生にとって聞きなれない言葉であるので、質問ではコンピュータ・リテラシーとした。

1) イメージ

リテラシーへのイメージは豊田(2001)が開発し、すでに和田(2004)が教科に測定を実施したSD法の尺度を用いた。これは、狭い-広い、専門的-身近、不便-便利、恐い-優しい、退屈な-興味深い、不安な-安心な、雑然とした-整理された、の7つの語句の対に、自分の考えているイメージがどちらに近いかを5件法で測定するものである。

2) リテラシーの認知度

リテラシーについて、自分がどの程度知っているかについて、「非常に良く知っている」から「全く知らない」までを7点尺度で測定した。

3) リテラシーの区別

メディア・リテラシー、情報リテラシー、コンピュータ・リテラシーについて山内の分類(2003)により各3項目合計9項目を列举し、その中からメディア・リテラシーに該当

する3項目を選択させた。

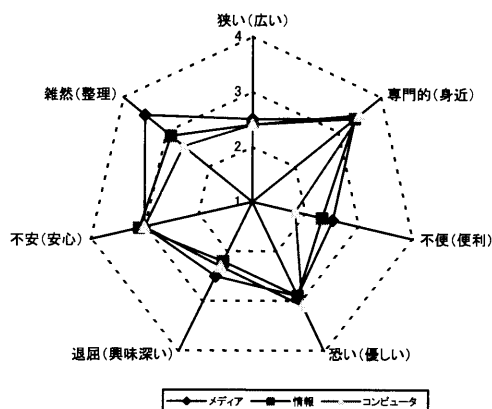
4) 授業におけるリテラシー教育の重要度

高校普通教科「情報」の授業でリテラシーを重視して教える程度を質問した。山内(2003)の例「少年がウェブで新聞社のニュースを読んでいる」場面に基づき、メディア・リテラシー(「・・・批判的な態度で読めるような学習」)、情報リテラシー(「・・・適切な情報が得られるような学習」)、コンピュータ・リテラシー(「・・・URLとは何かについてか学ぶ」)のそれぞれの教える内容を示し、教える程度を「非常に重視する」から「全く重視しない」までの7点尺度で測定した。

2.3 結果

1) イメージ

メディア・リテラシーのイメージが情報リテラシー、コンピュータ・リテラシーと異なっている点は、雑然としていることであった(図2-1)。



N=24, 平均値3=どちらでもない

図2-1 メディア・リテラシーのイメージ

2) リテラシーの認知

3つのリテラシーの認知度の結果は表2-1となり、平均値の差は有意であった($F(2,30)=3.75, p<.05$)。LSD法を用いた多重比較により、メディア・リテラシーは情報リ

テラシーとコンピュータ・リテラシーに比べて平均値が低く、情報リテラシーとコンピュータ・リテラシーの平均値の差はなかった (Mse=.82, 5%水準)。

表 2-1 リテラシーの認知度

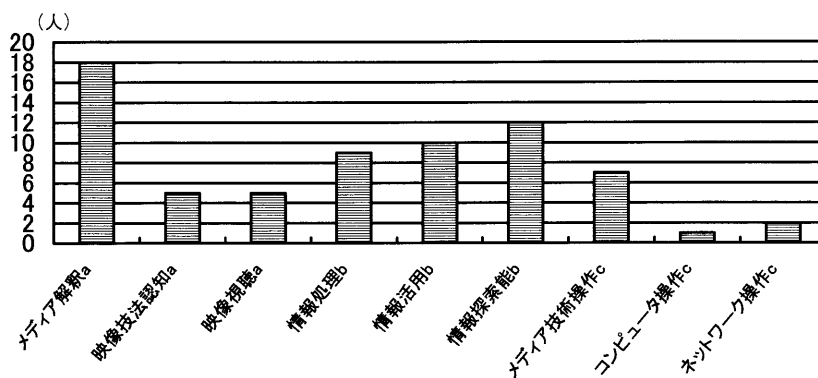
	メディア	情報	コンピュータ
平均値	3.00	3.81	3.69
SD	1.50	1.18	1.16

N=16, 7点尺度

3) リテラシーの区別

メディア・リテラシーに該当する項目を選

択させた結果、メディア解釈 (「メディアを解釈して表現すること」) を選んだ回答者は 18人、映像技法認知能力 (「映像技法の認知能力を高めること」) と映像視聴能力 (「映像視聴能力を高めること」) は 5 人であった。またメディア・リテラシーを、情報リテラシー (情報処理・情報活用能力・情報探索能力) と誤った回答者が存在した (図 2-2)。さらに、2) リテラシーの認知で、メディア・リテラシーを知っている方とした回答者 6 名中 4 名が情報リテラシーをメディア・リテラシーであると回答していた。



a: メディア, b: 情報, c: コンピュータ

図 2-2 メディア・リテラシーの認知

4) 授業におけるリテラシー教育の重要度

リテラシーを教える重要度の結果は表 2-2 となり、平均値の差は有意であった ($F(2,48)=4.13, p<.05$)。LSD法を用いた多重比較では、情報リテラシーはコンピュータ・リテラシーに比べて平均値が高かったが、メディア・リテラシーとコンピュータ・リテラシーの平均値の差はなかった。(Mse=2.08, 5%水準)。

表 2-2 リテラシー教授の重要度

	メディア	情報	コンピュータ
平均値	5.32	6.04	4.88
SD	1.35	1.17	1.56

N=25, 7点尺度

2.4 考察

メディア・リテラシーのイメージは、情報リテラシー、コンピュータ・リテラシーよりも雑然としていると認知されていた (図 2-1)。それは、メディア・リテラシーがコンピュータ・リテラシーや情報リテラシーに比べて認知度が低く (表 2-1)、しかもメディア・リテラシーがコンピュータ・リテラシーと情報リテラシーと区別できていないこと (図 2-2) からくると思われる。リテラシー教授において、情報リテラシーへの教授の重要度が高い (表 2-2) ことは、学習指導要領にそったものであると考えられる。また、山内 (2003) の指摘したコンピュータ・リテラシー教授の重視が、本研究の回答者では高

くないことが明らかになった。

3. 課 題

本研究では、「情報」教員養成学生のメディア・リテラシーについての態度を調べた。その結果、メディア・リテラシーは雑然としているイメージがあり、さらに認知が低く、他のリテラシーと区別できていないという問題点も明らかになった。さらに特にメディア・リテラシー教育を重要なものであるとも思っていないことが示された。水越（1996）の教員を対象にした研究では、メディア・リテラシーへの目標の重要性への認識と教育実践状況には大きなギャップがあることが示されている。したがって、本研究の回答者が、メディア・リテラシー教育を実施する可能性は少ないとも考えられる。

リテラシー教育がコンピュータ・リテラシーのみを重視した教育となる可能性（山内，2002；黒上，2002）は、本研究の結果及び、コンピュータ・リテラシーを重視する「情報B」の設置が少ない状況から考えると少ないと想定される。

しかし、高等学校の教科「情報」は、メディア・リテラシーではなく、情報リテラシーを重視して教えられる可能性が高い。本研究の回答者である教員養成学生も情報リテラシー重視教授が明らかになり、学校現場で多くを占める「情報A」でも「情報活用の実践力」の実習に半分以上の時間が配当されるように指導されている。したがって、このままでは、情報リテラシーのみが「情報」の授業で行なわれる可能性が高い。

そこで、メディア・リテラシーを「情報」の授業で実施させるために、学生への教育としてメディア・リテラシー教育実践（園屋，2002）が必要とされるであろう。これは、教科「情報」の免許科目受講生に、メディア・リテラシーと情報リテラシーを両方組み込ん

で教えていく方法である。教科「情報」の学習指導要領に対応した、情報の「収集能力」「判断能力」「発信能力」「モラル」について、インターネットとマス・メディア双方の情報について教育実践を行なうものである。

また、マス・メディアからの情報を批判的に考えるようにと教えることは、新しい考え方であり、今後、定着するかどうかは不明である。日本では昔からマス・メディアからの情報を取り入れて日本人に利用しやすい形に変えてきた経緯がある。例えば、中国の『三才図会』を日本風にアレンジした『和漢三才図会』は、情報の宝庫として江戸時代に大流行した。インターネットから得られる情報についても、内容を批判しながら考えるよりも、とりあえず、必要な情報を膨大な情報源からとにかく収集していくことが先行していく。情報を収集してストックした後で、自分の使いやすいように変形させていくことが行なわれていくと思われる。それは、小笠原（2004）が主張するように、知識獲得観としての「やりとりモデル」によって獲得されたインターネットからの知識が、人とのかわり知識の正しさや意味合いを個々に変えていくという「かわりモデル」の形に変形されていくものであろう。

高視聴率のテレビ番組の消滅などから考えると、これから先われわれがマス・メディアから共通の情報を得ていくことは少なくなっていくことが考えられる。そこでメディア・リテラシー教育がメディアからの情報の分析・批判ではなく、メディア接触を高めるための手段になる可能性も出ている。例えば、新聞の接触時間平均は1日に23分であり（NHK，2001）、新聞を対象としたメディア・リテラシー教育は、新聞への接触を増やすことにつながり、新聞社も積極的に推進している。メディアに批判的といえながら結局は親和的な態度を育てていくのではないかというメディア・リテラシー教育の持つジレンマ

(佐賀, 1996) が現実のものとなりつつある。

一方、情報の収集・活用・発信では、すでに携帯等のパーソナル・メディアが先行し、山内 (2002) もメディア・リテラシーの実践は、携帯電話などのパーソナル・メディアを対象として行われていないことを指摘している。

したがって、情報リテラシー教育の中でメディア・リテラシー教育を行なうことは、情報と関わるプロセスにおいて、情報を人のかかわりでどの様に変えていくかを教えていくことになるであろう。

参考文献

- Face to Face Media (1997) *Scanning Television*, Harcourt Canada (鈴木みどり監修・監訳 (2003) 『スキヤニング・テレビジョン日本版』イメージサイエンス社)
- 黒上晴夫 (2002) 「情報科にメディア・リテラシーを取りこむ」『解放教育』419, 17-22.
- 水越敏行 (1996) 「リテラシー概念の変遷」『変わるメディアと教育のありかた』ミネルヴァ書房
- 水越伸 (2002) 『新版デジタル・メディア社会』岩波書店
- Masterman, L. (1985) *Teaching the Media*, London.: Comedia.
- 文部省 (2000) 『高等学校学習指導要領解説 情報編』開隆堂
- 森田英嗣 (2002) 「「メディア・リテラシー」は「情報リテラシー」や「情報活用能力」とどうちがうのか?」『解放教育』419, 9-16.
- NHK放送文化研究所 (2001) 『データブック 国民生活時間調査2000』日本放送出版協会
- 小笠原喜康 (2004) 「メディエイトする身体—第3領域教育メディア研究への模索—」『教育メディア研究』10(2), 53-62.
- Ontario Ministry of Education (1989) *Media Literacy: Resource Guide*, Queen's Printer for Ontario (FCT訳 (1992) 『メディア・リテラシー—マス・メディアを読み解く—』リベルタ出版)
- 佐賀啓男 (1996) 「「メディア教育」は成功したか失敗したか(その3) BFI実態調査の結果」『視聴覚教育』50(11), 42-43.
- 斎藤俊則 (2004) 「情報教育の観点から見たメディア・リテラシーの必要性とその教育内容」『情報処理学会論文誌』45, 12, 2856-2867.
- Silverblatt, A., Ferry, J., & Finan, B. (1999) *Approaches to Media Literacy: a Handbook*, New York. M.E.Sharpe, Inc. (安田尚監訳 (2001) 『メディア・リテラシーの方法』リベルタ出版)
- 園屋高志 (2002) 「大学生に対するメディア教育の試み(5) —「情報メディア論」等の授業実践を通して—」『日本教育工学研究報告集』2(3), 93-98.
- 鈴木みどり編 (1999) 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』3版 世界思想社
- 鈴木みどり編 (2004) 『新版Study Guideメディア・リテラシー入門編』リベルタ出版
- 登丸あすか (2003a) 「高校生を対象としたメディア・リテラシー教育の実践 前編」『視聴覚教育』57(11), 50-53.
- 登丸あすか (2003b) 「高校生を対象としたメディア・リテラシー教育の実践 後編」『視聴覚教育』57(12), 55-57.
- 東京都教育庁 (2004. 8. 26) 「平成17年度使用都立中高一貫6年制学校(中学校)用教科書, 都立盲・ろう・養護学校(小・中学部)用教科書及び都立高等学校用(都立盲・ろう・養護学校高等部を含む。)教科書の採択結果について」プレス発表資料8月26日付け <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr040826s.pdf> 2004. 1. 4 取得

豊田秀樹（2001）「確認的ポジショニング分析－印象変化の発見と認知マップの評価のための多変量解析法－」『心理学研究』72(5), 397-403.

山内祐平（2003）『デジタル社会のリテラシー』岩波書店

和田正人（2004）「高等教育におけるマス・

メディア接触の影響－心理学・社会心理学・教育工学・情報教育へのイメージ及び興味・知識－」『東京学芸大学紀要教育科学』55, 345-351.

全国高等学校新聞教育研究会（2002）『高校の情報教育－メディア・リテラシーを学ぶ－』黎明書房

An Instruction of Media Literacy for Pre-Service Teacher Training:
“Information Study”, General Course Subject at High School.

WADA, Masato (Tokyo Gakugei University)

This study investigated pre-service teacher training college students' attitudes towards Media Literacy (ML) teaching “Information Study”, general course subject at high school. Twenty-five students answered a questionnaire that consisted of an image, knowledge, and the conscious of importance of teaching ML, Information Literacy (IL), and Computer Literacy (CL). The result indicated that they had more complex images and less knowledge regarding ML than other literacy. They mistook IL for ML. They were conscious of the importance of IL teaching and less conscious regarding the importance of CL.

Key words : Media Literacy, Information Study, Pre-Service Teacher Training, Information Literacy, Computer Literacy